

明宮の瑣細な事事

丘良任 訳／于濬濤

「猫児房」（ネコ小房）

明宮はネコを飼育する好みがあり、「猫児房」の設置がある。皇帝側近の従者三、四人は皇帝のネコを飼う。皇帝に愛されるネコに「管事」（家扶に似る役人）（本文中、凡そ括弧内の文句は訳者の注釈）の役柄を与える。おすのを何何「小廝」（小者）、めすのを何何「丫頭」（幼い女中）と称する。その去勢したネコを何何「老爹」（ご老人）と称する。名位があったら何何「管事」あるいは「ネコ管事」と称する（以上の「管事」「小廝」「丫頭」「老爹」などは皆ネコを人格化したとなえ）。秦徵蘭「天啓宮詞」：“紅鬪無塵白晝長、丫頭日日侍君王”（赤い毛氈は塵もなし、晝は永い。「丫頭」は日日君王に侍る）、この「丫頭」はすなわちネコである。ネコは寵愛を受けた以上、それに取って手出しをする人はいない。ネコの騒ぐ声は大きいから皇帝のあかごはネコの騒ぐ声にひどく驚かされて引き付けを起こしたのもある。

ある人はこういう：宮中にネコを飼うのは、皇帝の子孫は深い宮闈の中で成長して人間出産することが知らない、ネコを飼うことを以ってそれらに牝牡の理を知らせて子や孫の多いのを望むからである。

嘉靖年間（1522—1566）宮中にこの様なネコ一匹がある：微かな青い色、眉が清らかで白い、「霜眉」と名づけた。このネコは人の意を解り、皇帝に呼ばれるとすぐ皇帝の前に出て来る。皇帝の外出するとき、ネコが先導をする。皇帝のねるとき、ネコが寝台の側に守る。寸歩も離れない。皇帝はそれが一番可愛がる。その後、「霜眉」が死んだ。それを金棺に納めて万歳山に葬る。その上に読経して加持祈禱する。袁之榮に禱詞を書かしめる、そのなかに「仙獅爲竜」（仙去した獅子——ネコをさす—は竜になった）の文句がある。その墓碑に「虬竜塚」（ミズチの塚）と題した。このことは「日下旧聞考」に記載してある。「全史宮詞」に詞があり：“万歳山陰小碑鏤、獅竜變化最堪憐、持杯暗向霜眉酌、尚怪君王雨露偏”（万歳山に小さい墓碑があり、「霜眉」の死は最も可哀そう、さかずきを持ってそれに酒を酌いで、ひそかに君王の恩を施すことの片寄るのを咎める）、この詞はすなわち「霜眉」のことを咏うのである。

鵝鳥の脳味噌で「画眉」（トラツグミ）を飼う

正徳帝は「画眉」飼いを好む、饒智元「正徳宮詞」に”九子祠連百子池、春深帳殿落花時、緑窓人静日亭午、開

向彫籠調画眉”（その大意は落花時節の正午にトラツグミをからかう）との文句がある。ある人は、“トラツグミは鵝鳥の脳味噌を啄む好き、生れたばかりの鵝鳥の脳味噌を以ってトラツグミを飼えば後者の鳴声が非常に聞きよい”というた。そこで正徳帝は「光祿寺」（皇帝の食事を調える役所）に命じて：トラツグミの飼料として毎日ひな鵝鳥の脳味噌三百揃いを献上する。少卿（官名）楊瑋は上書して、“天下人民が疲弊し国力が衰える時、何処から沢山な鵝鳥のひなを取るか、況して物命を傷残するも殺生を好まない義理に背く”というたが皇帝は大いに怒った彼を廬州に左遷した。只、トラツグミを飼う、トラツグミの鳴声をきく爲、毎日何百羽の鵝鳥のひなの脳味噌で飼うことは聞く人を驚かすといえる。楊瑋は唯このことの非を上言して、あろうことが左遷された。正徳帝のぼんやり暗くて横暴な程度は一層推して知るべし。

「篋頭房」（すき櫛で髪をすく部屋）

明宮に「篋頭房」がある。側近の従者十余人はもっぱら皇子、皇女の爲に「請髮」（頭を剃る）「留髮」（髪を長くのばす）「入囊」（髪を袋に入る）

